

一〇一五年二月六日

飛ぶ鳥のごとく高舞ふ風落葉
山茶花の蕾をほぐす玉日和
坂道に一息つけば帰り花
どの梢なく鳥語洩る枯木立
池小春鯉を指さすベビーカー

ほんこ
澄子
うつぎ
康子
よし女

一〇一五年二月五日

鴨の水脈川面の摩天楼ゆらす
耕し手ゐない田圃か芒原
トンネルを抜ければ荒磯波の花
前山の枯れてあらはや獸道

あひる
千鶴
みきお
うつぎ

一〇一五年二月四日

水上バス落葉畳を二分けに
ぎいと開く枯藪まとふ館の門
デパ地下は主婦の戦場街師走
心字池ひと巡りして紅葉愛づ
紅葉燃ゆ胸の中まで染まるほど

あひる
むべ
せいじ
澄子
うつぎ

一〇一五年二月三日

炉を囲む灰の匂ひの円座かな
御座船の波にたゆたふ浮寝鳥
帰り咲く蒲公英に気をもらひけり
こぼれ香に知る柊の咲きしこと

うつぎ
澄子
せいじ
むべ

一〇一五年二月二日

冬の日矢洩るる千本鳥居かな
日当れば枯山少し和みけり
枯木立透けたる空に大鳥居
ひもすがら黄落やまぬ大路かな

康子
明日香
澄子
和繁

客去りて囲炉裏に残る熾火かな
薄墨に嶺々をぼかして冬の霧
火吹竹眠れる燠を起こしけり
十重二十重枝打ち交はす庭紅葉
口笛を吹き合ふやうに鶴騒ぐ
唐門の透かし彫りから庭紅葉

あひる
あひる
ほたる
明日香
もとこ

一〇一五年二月二〇日

堆き落葉くるぶしくすぐりぬ
あつあつのコーヒー淹るる霧の朝
鉄鍋の黒々として榎明り

澄子
うつぎ
むべ

毎日句会みのる選・一〇一五年二月八日